南海に散った姉愛し

終戦の日が近づくと、涙と共に姉を思い出す。沖縄戦で米軍に追いつめられ、夫と共にマブニ絶壁から海に投身したあの姉を。

四つ年上の姉。母は若くして死に、継母（ままはは）が来、連れ子たちとけんか絶えない私を心配した父は、叔父にもらってもらう。私が小学二年の時のことである。別離を悲しんだ姉の作文は悲痛を極め、中央で賞を取ったらしい。母の長年の病気で家はすっかり傾き、父は市会議員もやめていた。

私の服を買いに姉と行った。父は姉に金でなく名刺を渡していた。店の奥でしばらく待たされた姉は手ぶらで顔を赤くして出てきた。名刺はもはやききめがなかったのである。姉もまだ小学生。父がかわいそう—服のことより父の心を思った。

姉は女学校進学をあきらめ高等科に進み、女子師範をめざした。学資は一切不要、月々学資金もくれるから、優れた貧乏人が殺到しすごい難関。おとなしすぎて、バカ扱いにされていた姉が一回で合格した時、皆はアゼンとしていた。

継母は性悪で、私たち先妻の子を冷遇した。姉の給費までもとりあげた。着物の仕立て実習では布地が買えず、自分の着物を洗っての仕立て直しは先生から受け付けてもらえなかった。こんな悲しみは幾らでもあった。

そのころ、父はいよいよせっぱつまり、街頭で米をふくらませるバクダン菓子売りをしていた。姉は学校がひけると、そのまま駆けつけ父を手伝っていた。そのことがやがて学校に知れ、職員会議にかけられる。「師範の名誉を汚す」「制服姿は不謹慎」「そんなことがないための給費だ」などと、次元の低い先生方である。ひとりぐらい弁護するのがいてもよいはずだ。それでも姉はカバンと制服を隠して父と街に立っていた。

子供のころから不運続きの姉。名前は光子。よい夫にめぐりあい、共に死ぬまでの数年間は、しかし、輝いていた。あの戦乱下、子がないのも幸運だった。子は死の道連れにはされない。

（一九八五年八月十三日）